

メディアがつくる東北方言イメージの調査・研究：
その拡散と変遷

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2020-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 滋子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00027323

令和元年6月12日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02725

研究課題名(和文)メディアがつくる東北方言イメージの調査・研究—その拡散と変遷

研究課題名(英文)Study on the image of Tohoku Dialect in mass media

研究代表者

熊谷 滋子(Kumagai, Shigeko)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：30195515

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、方言蔑視の強かった高度経済成長期頃に比べ、方言の価値が高まったとされる今日においても、ドラマ、娯楽番組などのメディアを通して、地域方言をめぐるステレオタイプが再生産されていること、特に東北方言は「田舎・粗野・下層・老人」といったマイナスイメージが依然としてみられることを明らかにした。マイナスイメージをもたせたメディア表象による現実社会における東北方言話者への悪影響が少なくないと考えられ、東北方言母語話者のコンプレックスを強化してしまう恐れがある。多様性が叫ばれる社会において、このような方言イメージを再生産するメディアのあり方について、より一層の改善を求めるべきであることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、1990年代以降、メディアが方言を積極的に利用するようになって以来、方言ブームを作り出し、方言はいいもの、大切なものという意識をつくってきたかに見える。しかし、その内容は、例えば、東北方言は「田舎・粗野・下層・老人」といった、依然からあるマイナスイメージをもったものである。ドラマのヒロインには不向きなままである。このようなイメージは、東北方言母語話者にとっては、いわゆる方言コンプレックスを解消するどころか、強化してしまうものとなっている。このようなメディア状況を改善するための手がかりの具体例を示すことで、より分かりやすく伝え、特にメディアに従事する関係者に対して、改善を促したい。

研究成果の概要(英文)：This study aims to investigate the persistent reproduction of negative images of Tohoku Dialect in Japanese media even in the age of regional dialects with positive value. Through the investigation, I concludes that Tohoku dialect still has the negative images such as rusticity, roughness, lower class, aged people and so on. This image had and will have a harmful influence on the native speakers of Tohoku dialect, who feel inferiority complex about Tohoku dialect. Since diversity is pursued in present Japan, the persistent reproduction of negative images of Tohoku Dialect through Japanese media should be reconsidered.

研究分野：社会言語学

キーワード：東北方言 イメージ ステレオタイプ メディア表象 ジェンダー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、方言が、テレビドラマ、娯楽番組、小説やマンガ、さらには地域おこしや被災地への励まし、そしてインターネットでのやりとりなど様々なところで使用されるようになってきている。このような状況について、方言研究者は、かつての方言が恥ずかしいもの、隠すべきものとされていた時期に比べ、方言が肯定的なイメージをもつようになったためだという認識を広くもつようになってきている。戦後から高度経済成長期において、地方出身者が上京し、就職したものの、方言コンプレックスを抱くようになり、ことばの面でも相当な苦勞をしてきたのに比べ、1980年代以降は、全国向けのメディアで、方言が積極的に利用されるようになり、むしろ自身のアイデンティティとしても、あるいは、自己アピールの1つとして、方言を肯定的にとらえるようになったのではないかという認識が支持されるようになってきた。

また、方言話者は共通語も使えるようになり、方言と共通語を「使い分け」ることができるようになってきたことも、方言を肯定的にとらえるようになった要因ではないかという認識もでてきた。TPOに合わせて、方言話者が方言を使うかどうか選択できるようになり、方言を使用する場合は、それなりの思い・心情が込められているためであると考えられるようになってきた。つまり、気持ちを伝えるときには、共通語ではなく、方言を使用するという発想である。

これらの点をふまえて、本研究は、方言のイメージ、特に東北方言のイメージがメディアにおいてどう表象されているのか、具体的な作品を取り上げて、検証しようとするものである。

2. 研究の目的

方言が様々なメディアで使用されるようになってきた現代において、はたしてそのことが何を意味しているのかを解き明かそうとすることが本研究の目的である。

方言が肯定的なイメージをもつようになったとする言説が、はたして、東北方言にもあてはまるのかどうかという点を検証する。つまり、東北方言は、井上史雄(1977)や田中ゆかり(2011, 2016)などのイメージ調査によると、「田舎、粗野、無教養、昔、年寄、若い女性にはふさわしくない」などの否定的なイメージを強くもちあわせていると思われるからである。若者に人気の関西方言、もしくは、西日本方言などと比べて、東北方言のイメージは相変わらず、否定的なもの執拗にあるのではないかと考えられるため、2000年代以降のメディアで、東北方言がどのように表象されているのか、具体的に検証する。

さらに、このようなイメージが、大学生にとってどう意識されているのかについて、可能であれば、日米の大学生を対象に意識調査を実施する。

3. 研究の方法

本研究では、以下の3点を中心に、メディアで具体的に使用された東北方言、ないしは、東北方言的なものの特徴を言語学的に文字化した上で分析し、そのイメージを含めた表象のされ方を明らかにする。その上で、日米の大学生を対象に、それらの方言が使用されたドラマや番組を視聴してもらい、どのようなイメージをもつのか、アンケート調査する。

詳しくいうと、メディアで実際に用いられた東北方言の言語特徴を明らかにすることで、東北方言をめぐり、どのようなイメージがつけられているのか考察する。テレビでは、まず、全国向けに放送されているものの中から、NHK連続テレビ小説のうち、東北を舞台にしたものや、東北方言話者が登場するものを対象にする。それらの作品において、使用される東北方言の特徴、また、東北方言話者として登場する人物の特徴、この点は、特に女性の登場人物に注目し、方言とジェンダーから検討する。次に、娯楽番組において、共通語話者があえて東北方言を用いてトークするというものを選び、使用された東北方言の特徴と方言を利用して語られた話題との関係性などを分析する。これは、社会言語学では、言語越境と称される現象であり、なぜマジョリティ側の立場の人が、あえてマイノリティ側の方言を用いるのか、そしてその効果について検証する。

さらに、アメリカの文学作品の日本語訳に用いられる東北方言的なものを対象に、使用された言語特徴と東北方言を使用する人物特徴を明らかにする。以上を分析し、結果的に、現代のメディアにおいて、東北方言がどのように表象されているのかを明らかにする。

次に、意識調査である。日本とアメリカの大学生を対象に、東北方言を用いて作られた番組を視聴してもらい、どのようなイメージをもつのか、アンケート調査を実施する。その結果を比較検討する。

4. 研究成果

本研究で明らかになったことを以下、5点にわたって述べる。

(1) 使用された東北方言

ドラマ作品において使用された東北方言は、他の方言使用にも共通するものであるが、全国的によく知られたわずかの、人称を含めた語彙や文法、表現に終始し、単純化された、時に間違った方言が強調された形で使用されている。NHK連続テレビ小説の場合は、方言を使用する場合には、「○○ことば指導」というクレジットが入るようになり、使用される方言がきちんとしたものであることを示しているが、実際に作品を分析すると、違っているものがあったりするため、ドラマ作品での方言使用は、あくまでドラマの展開上必要となった範囲で、都合よく

なされているにすぎないといえる。

娯楽番組における、共通語話者による東北方言を用いたトークは、さらに一層単純化され、一方では濁音化が激しくなされ、アクセントやイントネーションもおかしく用いた、結果的に共通語話者が勝手にイメージしている東北方言を再現しているにすぎないと思われる。たとえば、「かいいだ」(痒い)という表現は、「だ」を付けるものであるが、東北方言ではない。むしろ、中部方言である。が、メディアなどでは、あたかも東北方言であるかのように用いられているため、東北方言の特徴であるかのように思われてしまっている。勘違いされた東北方言が使われているのも、共通語話者による東北方言使用としてはよくあることである。

アメリカ文学の日本語訳についても、白人には共通語で訳しているのに対し、「黒人奴隷」などには東北方言的な話し言葉で訳されている。2015年に出版された新訳2冊を調査したところ、「黒人奴隷」には、東北方言的なものが使用されており、その中の1冊は、旧訳よりもさらに濁音化が激しくなされ、読む場合はともかく、実際発音しにくい東北方言にはない、濁音化がなされている。前述した娯楽番組の場合と同様、翻訳者が共通語話者であるために、イメージした東北方言を再現しているものと思われる。

(2) 東北方言を使用する登場人物の性格付け：ジェンダーから

東北方言の基本的イメージは、「年寄、農民」というものであり、井上らのイメージ調査から、「若い女性には似合わない」ということが1970年代指摘されてきている。この点において、2000年代に放送されたNHKで全国向けのドラマを対象に、東北を舞台にするか、東北方言話者が登場するものを分析し、どのような人物が東北方言を話しているのかいないのかについて考察した。

結論からいうと、NHKのドラマについては、連続テレビ小説も地域ドラマも、東北を舞台とする場合は、ヒロインは東北方言母語話者という設定をしない、もしくは、東北方言母語話者であっても、東北方言を使わせないという傾向がみえてきた。2013年に放送された『あまちゃん』では、東京出身のヒロインが、母の郷里である岩手にやってきて、地元の方言を学び、使うようになるが、共通語話者のイメージが前提にあり、本来の東北方言母語話者ではないというイメージがある。したがって、いくらヒロインが東北方言を用いていたとしても、基本は共通語話者であることに変わりがないのだ。さらに、ヒロイン以外でも、地元出身にもかかわらず、「若い」、「美人」、「専業主婦」、「都会好き」などの特徴を一つでもそなえた女性には、東北方言を使用させていない。

一方、東北方言を使用する女性は、「年寄」、「がさつ」、「ヒロインに批判的(いじわる)」、「ワーキングクラス」などの特徴を一つでももっているといえる。つまり、東北方言のイメージが、このようなタイプの女性であるということを伝えてしまっている。男性の登場人物の場合は、まだ、多様なタイプが東北方言を話している。以下の表に、NHK連続テレビ小説2作品における、女性の登場人物の使用言語と役柄などの特徴をまとめる。

表1 . NHK連続テレビ小説 2007年放送『どんど晴れ』に登場する女性たち

使用言語	役柄 / 職業	年代	その他の特徴
東北方言	フィアンセの祖母 / 大女将	最年長 (80代)	上品、南部弁が上手
	中居頭	年配	ヒロインに批判的
	中居たち	中年、若い	ヒロインに批判的
共通語話者	フィアンセの叔母 / 女将	年配	
	フィアンセの義姉 / 専業主婦	若い	ヒロインを支持
	中居たち	若い	ヒロインを支持
	フィアンセの元同級生 / 女将修行	若い	ヒロインの恋敵
	ヒロイン / 女将修行	若い	
	ヒロインの元同級生 / フィアンセの同僚	若い	ヒロインの友人
	ヒロインの母 / 専業	中年	

	主婦		
	写真家	若い	ヒロインを支持
	旅館の客 / エコノミスト	中年	シングルマザー、キャリアウーマン

表2 . NHK 連続テレビ小説 2013 年放送『あまちゃん』に登場する女性たち

使用言語	役柄 / 職業	年代	その他の特徴
東北方言話者	ヒロインの祖母 / 海女	最年長	
	海女たち	中年、年配	
	観光協会の事務職員	中年	
共通語話者	ヒロインの母 / 専業主婦	中年	若い頃、東京にあこがれ、アイドルをめざした
	ヒロイン / 高校生	若い	
	ヒロインの同級生	若い	ミス北鉄、東京にあこがれ、アイドル願望が強い
	ヒロインの同級生の母 / 専業主婦	中年	元テレビのニュースキャスター
	女優	中年	

NHK 連続テレビ小説では、関西地域が舞台となると、男女問わずほぼ全員が関西方言を使用するのは対照的に、東北方言においては、ヒロインでさえ、東北方言を使用させない工夫をしている。2000 年代においても、1970 年代に調査した当時の東北方言のイメージである「若い女性には似合わない」ということが変わりなくあるテレビで展開されているということが明らかになった。結果として、東北方言のイメージはネガティブなままである。

(3) 娯楽番組における東北方言とその内容

『徹子の部屋』スペシャルコンサートにおいて、黒柳徹子と加山雄三による「東北弁トーク」のコーナーを分析対象とした。ここでは、普段は共通語、もしくは「女ことば」を使用している、往年の大スターが、東北方言を使用して、面白おかしくトークしている。使用された東北方言は、濁音中心で、語彙や表現などはほとんどなく、むしろくだけた、雑な共通語を濁音化させて話しているのが特徴的である。そのため、東北方言は雑な言葉遣いであることを印象づけているように見える。また、興味深いことに、東北方言を使用した話題は、主に下世話なもの（下半身にまつわるもの、常識では考えられないほどおかしいこと）などが大声で語られ、結果的に、観客に笑いをさそうものとなり、主に「お笑い」的な内容に終始している。同じ「お笑い」でも、漫才などに代表される関西方言で語られるお笑いとは違って、東北方言で醸し出されるのは、農村風景を背景とした土臭い笑いである。

が、そのトークは回を重ねるほどの人気があり、その点では、興行的に成功しているといえる。しかも、このコーナーについて、大学生に視聴してもらい、視聴する前と後で、黒柳と加山のイメージが変わったか、また、東北方言のイメージはどうかというアンケート調査を行ったところ、黒柳と加山のイメージは「お堅い、都会のスター」から、「どこでもいる人のいいおばあさん、おじいさん」となり、より親しみがもてるようになったとしている。一方、東北方言については、田舎くさいことばであるというイメージに変化はなかった。この点から、共通語話者が東北方言を利用することのメリット、好感度が上がること、があり、結果的に、自分たちにとってのイメージが高まる方言利用であるものの、東北方言のイメージは、「田舎臭い」という否定的なままである。これは、共通語話者のいいとこ取りとしての方言利用であり、東北方言の否定的イメージの再生産に加担しているといえる。

(4) 翻訳における東北方言とその使用人物

アメリカ文学における日本語訳について、2015 年に出版された『風と共に去りぬ』の新訳 2 冊を調査した結果、依然として、「黒人奴隷」は東北方言的な話し方で訳されていることが分かった。白人の日本語訳は、共通語、もしくは「女ことば」であり、さらにいえば、白人女性の言葉遣いが旧訳よりも、より「女ことば」的になっていることが特徴的としてあげられる。一方で、「黒人奴隷」の言葉遣いは、東北方言的で、「おれ」という自称詞を使い、その他は濁音化がみられるだけである。1 冊は、旧訳よりももっと濃い濁音化がなされ、本来の東北方言とは違った濁音化がなされている。濁音化することが東北方言であるというイメージが伝えられ

ている。つまり、外国作品を日本語に翻訳する場合、白人とは違い、東北方言は「黒人奴隷」などの下層階級の話すことばというイメージが維持され、再生産されてしまっている。この点から、東北方言のイメージは、翻訳作品についてもネガティブなままである。

(5) 意識調査の結果

意識調査においては、日本語を母語とする学生に対しては、様々な機会に、東北方言を使用しているドラマ作品や翻訳などについて、どのように感じるのか、アンケート調査を実施している。そこでは、方言ブームの昨今にあっても、東北方言は依然として、「田舎のことば」「土臭い」「年寄り」「昔の言葉」「若い女性にはにあわない」などのイメージが強いままであることが明らかになっている。特に東北方言話者である大学生にとっては、今でも東北方言にイメージが否定的なままであるため、自身の方言に自信がもてず、方言を隠して話すというコメントが常にある。

一方、アメリカの大学で日本語を学んでいる大学生に調査を行ったところ、上級日本語のクラスであっても、方言を理解するまでに至っていないことが分かり、本研究の課題もみえてきた。日本でも若者に人気の関西方言については、アメリカの大学生もある程度は理解し、「お笑い」の部分では、笑えるほど認知されているのだが、東北方言については全くといっていいほど認知されていないことが、今回の調査によって、判明した。この点は、今後の貴重な課題としたい。

全体として、方言ブームの現代の日本社会にあって、依然として東北方言はメディアにおいて、否定的なイメージによって表象され続けており、東北、東北方言、東北方言話者にとっては、堂々とつかえないことばのままであることが、本研究によって、明らかにできたのではないかと考える。今後も、メディアと方言の関係について、調査研究をしていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

Kumagai, Shigeko, Tohoku Dialect in NHK Morning Dramas: The Persistent Stigmatization of Tohoku Dialect in Japanese Media, 人文論集、査読無、69号の、2019、pp.103 - 129

熊谷滋子、濁音でコスプレされた東北方言らしさ、市民の科学、査読有、10号、2018、pp.68 - 79

熊谷滋子、「方言の価値が高まった」という言説を再考する、人文論集、査読無、68号の2、2018、pp.93 - 126

熊谷滋子、方言イメージが作り上げるドラマーNHK 地域ドラマが再生産する地域ステレオタイプ、ことば、査読有、38号、2017、pp.11 - 28

熊谷滋子、「女ことば」が衰微してきた」という言説を再考する、人文論集、査読無、67号の1、2016、pp.111 - 128

熊谷滋子、「あたしは、何よりもまず人間よ」と翻訳されるノーラ、市民の科学、査読有、9号、2016、pp.67 - 78

〔学会発表〕(計 2 件)

Kumagai, Shigeko, Media Activate Native Speakers to be Authentic Enough, 15th International Pragmatics Association, Belfast Northern Ireland, July 17 2017

Kumagai, Shigeko, Who speaks Tohoku Dialect? Stigmatization of Tohoku Dialect in the Media, 9th International Gender and Language Association, Hong Kong, May 20 2016

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：なし

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：なし

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。